



キラリ通信

平成29年2月1日 第8号

金王道整備保存会に聞きました

亀山市の南部に位置する昼生の里はウォーキングを楽しめる場所として市内外の人々に知られています。古くは平安時代末期に「渋谷金王丸」が駆け抜けたとされる金王道があり、開発などで途絶えてしまった箇所もありますが昼生地区には今もその面影を残す山道が残っています。

金王道整備保存会は今から約5年前に「金王道の整備を通じて地域の発展を図り、魅力あるまちづくりを推進する」目的で発足しました。現在は岩間喜久会長（79歳）はじめ79名の会員で活動をしています。主な活動は①金王道ウォーキングの開催（毎年5月と11月）、②地元小学校の遠足の引率（3年に1回）、③他地域からのウォーキングの案内、④金王道ウォーキングコースの案内板整備や草刈りなどを精力的に行っています。一方で、会員の高齢化や後継者の育成、ウォーキングコースのトイレ場所の確保など、課題を抱えています。特に山林や農用地の放棄地増加に伴って、ウォーキングコースが荒れ放題となってしまう、イベントの度に草刈りや整備が必要となっています。体力的にも負担が大きいため、若い世代の人が入会してくれることを切望しています。

平成29年秋には「金王道ウォーキング10周年」記念事業を計画しているとのこと。金王道ウォーキングは亀山市内で認知されつつあり、今後益々金王道整備保存会の活動に期待がかかることでしょう。

（キラリ市民記者 草川喜種）



金王道を歩く



金王道整備保存会の役員

東海道関宿街道まつりで「エコライフ診断」が行われる

今年も街道まつりで、亀山市総合環境研究センターのブース内で「エコライフ診断」が行われました。診断員は亀山市民大学キラリで「くらしのアドバイザー養成講座」を受講した修了生たちです。街道まつりでの「エコライフ診断」は毎年行われています。しかし、「エコライフ診断」に対する市民の認知度はまだまだ低いようでブースの前を素通りする通行者にエコライフ診断を勧めることから始まります。関心を示してブースに来ていただいた受診者には最初にエコライフ診断の主旨を説明した後「エコライフ診断記入シート」に記入していただきます。この記入シートには日常のエコライフに対する取り組み度に関する20の質問、家族構成、光熱費、交通機関の有無等が設問されています。記入内容をパソコンにインプットすると「エコライフ診断書」が印刷されます。この診断書には受診者に合ったエコライフのアドバイス、受診者の光熱費やガソリン代と三重県内の受診者と同じ家族構成の平均データとの比較、受診者の二酸化炭素年間排出量等が記載されています。診断員がその診断書を基に受診者に具体的なエコライフのアドバイスを行います。このエコライフ診断を毎年受診することで受診者はエコライフの進捗を数字で確認できます。

診断員によれば、診断を始めた頃に比べて生活形態が年々変化してきている、特に「オール電化」の家庭が増えてきている、そのため、パソコンに収録されている比較データも生活形態の変化（オール電化・エコカーの増加等）に対応していく必要がある、とのことでした。

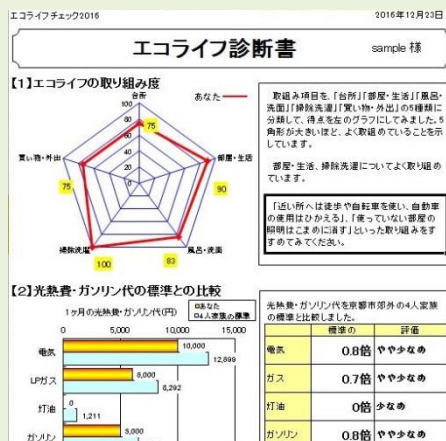
受診者から、エコライフには関心があるが「風呂の残り湯を使用するのは抵抗がある」、「暗い部屋はいや」、「いつでも温かいお茶が飲みたい」など生活の「こだわり」がありエコでないことは分かっているけれどもこの生活習慣は変えたくない、との意見がありました。この「こだわり」からの脱却を理解していただくことが診断員の仕事のようなのです。

皆様、これからもどこかの会場で「エコライフ診断」ブースを見かけたらぜひ立ち寄って受診してください。今回は57人の方が受診されました。

(キラリ市民記者 尾崎 末廣)



エコライフ診断の様子



エコライフ診断書 (参考)

みえ環境フェア2016開催

12月11日（日）メッセウイングみえで「みえ環境フェア2016」が開催されました。例年県内の民間企業や公共機関が地球温暖化防止の啓発やブースの出展をしています。当日は親子連れの来場者が多く訪れ、あずきを使ったマラカス作り（井村屋グループ）、クリスマスツリー作り（シャープ）、ドライブシミュレーター（損保ジャパン）、間伐材を利用した工作など、体験しながら環境学習をしていました。記者も人力自転車発電競争にチャレンジし、約80秒間漕ぎ続けて薄型テレビに映像を映し出すことができました。亀山市のブースは丸太切り体験や木の実作りで賑わっていました。

午後から中央ステージで浅田剛夫さん（井村屋グループ会長）と朴恵淑さん（三重県地球温暖化防止活動推進センター長）による「もったいない、企業活動と地球温暖化防止」と題した環境トークが行われました。井村屋の環境への取り組みについて、浅田会長は以下のように述べられました。

「主力製品であるあずきバー（年間で2億5000万本製造）の製造において、カーボンフットプリントに取り組み、生産・原料から始まって最終製品になるまでの過程で1箱あたり630gのCO₂を出していることが判った。数値化したことで社内の具体的な削減目標が明確となり、①あずきバー6本入りの箱ののり付けふたを約2cm短くすることで約65gの紙の削減、CO₂を2g削減できた。②蒸気ボイラーの燃料を従来の石化燃料から間伐材や建築廃材を用いたバイオマス燃料に替えた。③新しい冷凍倉庫を設置することで従来の倉庫の3倍のパレットを収納可能となった。尚且つ、冷凍装置の冷媒をフロンから環境負荷の少ないアンモニアCO₂に替えた。このような取り組みをすることで年間350トンのCO₂削減につながった。」

浅田会長は『環境に良い活動をするコストダウンにつながって経済効果にもなる』、そして井村屋は今後も『環境にやさしい会社づくりを目指していく』と締めくくりました。

（キラリ市民記者 草川喜種）



みえ環境フェアのブース



環境トーク